

令和六年度 書道講演会

令和6年11月7日
於・国立新美術館
3階講堂

「王羲之の眼差し、王羲之への憧憬」

九州国立博物館 館長 富田 淳



富田 淳氏

ただ今ご紹介にあずかりました、富田でございます。今日はこのような華やかな場にお招きいただきまして、まことにありがとうございます。大変光栄に存じます。

今ご紹介いただきましたように、今日は「王羲之の眼差し 王羲之への憧憬^{あしがれ}」、ということになります。私、文章を書くことが苦手です、お話をすることは更に苦手で、滑舌も悪いのですが、今日は心を込めてお話しさせていただきます。よろしくお願いたします。

実は、最初から謝らないといけません。今日はあまり学術的なお話ではなくて、もしかするとポイントが外れたような内容になるかと思えます。前半では、「王羲之の眼差し」ということでお話をさせていただきます。

まず、「王羲之の眼差し」。王羲之がどのような思いで書に対していたのか、王羲之は書を通して何をしようとしたのか。そのような王羲之の眼差しに近づくためには、まず何と書いても信頼できる王羲之の書を集める必要があります。日本国内にもいろいろありますが、理想を言えば海外からもそのような資料を集めないといけません。そこで今日はこれまで行ってまいりました海外展、一つは王羲之展、そしてもう一つは顔真卿展、この舞台裏をお話させていただきます。

そして、後半の「王羲之への憧憬」。こちらの方は、王羲之への憧憬というテーマでしたら幾らでも話題はあるのですが、今日はあえて、翁方綱と李宗瀚という内容で少しばかりお話をさせていただきます。と思います。

まずは前半部分、「王羲之の眼差し」です。ご紹介したい展覧会が二つございます。一つは、二〇一三年に開催した「書聖 王羲之」展、そしてもう一つは、二〇一九年に開催しました「顔真卿」展です。私の専門が中国の書ということ、中国関係の海外展を、これまで幾つか担当させてもらいました。二〇二二年は、北京故宮の展覧会、いろいろなジャンルの作品を出す総花展です。二〇一六年には、台北故宮の神品至宝という展覧会。これもいろいろなジャンルを出した総花展でございます。

そのような海外展をするたびに、同僚に言われ続けたことがあります。「おまえがチーフを務める海外展は、問題が起きないことがない」と。北京故宮展でも台北故宮展でも、それだけ取り上げて三日くらいのお話ができるくらい、い

ろいろな苦しい出来事がありました。今日お話しするのは書の展覧会の二本でございます。この二本もいろいろありました。

一つ目の展覧会は王羲之の展覧会です。右側(図1)が先行チラシです。最初、このような形で漠然と、と言ってはよくないのですけれども、チラシを作ります。左側(図2)が、いよ

図1 「書聖王羲之」展の先行チラシ

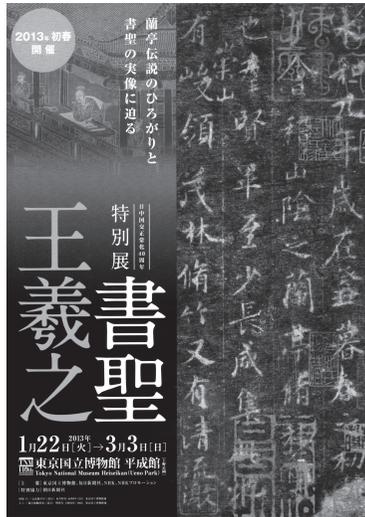


図2 「書聖王羲之」展の本チラシ



いよ作品が固まりまして、開幕の直前に発行したチラシということになります。

皆さん書に造詣の深い方ばかりだと思えますので、王羲之の説明は不必要だとは思いますが、四世紀の人です。中国、東晋時代の貴族です。貴族でありながら大変な能書でありました。「書聖古今第一」と評されます。そしてもう一つ、傑作「蘭亭序」は、後世に極めて大きな影響を与えました。ポイントを三つ挙げると、このようなことになるかと思えます。

忘れてはいけないことは、書聖と言われているながら、真筆が一つも現存しないということですから。これはどのようなことかと言いますと、歴代の皇帝が王羲之の書を好みました。全国からお金に糸目をつけず、王羲之の書を宮廷に集めました。そうしますと、中国王朝は変遷していきますので、政変が起きたときに一極集中していた王羲之の書が、燃えてしまったり、略奪されてしまったりします。これを繰り返していきまますので、十一世紀ぐらいには、ほとんど王羲之の本物の書はなかったと考えられています。

では、王羲之の信頼できる書は何なのか。それは、例えば皆さんご存じの「喪乱帖」です。どのようなものかと言いますと、唐時代の皇帝が、自分の手元に王羲之の肉筆、真筆があるわけですが、それらを元に、宮中抱えの専門職

人に作らせた非常に精巧な模本です。コピーです。複製品です。複製品なのですけれども、大変に出来がいいということで、現在、国宝に指定されています。これは皇居三の丸尚蔵館の所蔵です。

他に「孔侍中帖」、前田育徳会さんのものなどがあります。日本に三つほど、このような国宝級の名品があります。これはこれで、日本で時折展示します。そこで王羲之展では、海外からこのような双鉤填墨の名品中の名品をお借りしようと思いい、交渉してきました。当時、遼寧省博物館から、「万歳通天進帖」をお借りしようと思っていました。王羲之展は毎日新聞社さんの主催で、毎日新聞社さんは中国と太いパイプがあります。

そして当時の遼寧省博物館の館長が私の古くからの知り合いでして、「日本でこのような展覧会を開催したいのだけれども、これを貸してくれないか」と、だめ元でお聞きしたところ、「いいよ」と言ってくれたのです。これが来日したら、もう大変な騒ぎになるだろうと、その頃は心躍るような大変にうれいしい思いをしております。何と言いましても、王羲之以下、王氏一族の、現在は七十人十帖の作品を収める長い巻物です。これを持ってこようと思っていたわけですが、その確約が取れたわけです。現場では「貸

し出しをする」と言ってくれました。

これ(図3)が、その「万歳通天進帖」の冒頭にあります「姨母帖」です。大変有名なものです。王羲之が若い頃に書いた書です。左側(図4)が先ほどの「喪乱帖」です。皆さんでご覧ください。右側(図3)から左側(図4)まで書風が変わるのです。われわれは、唐時代以降の歴史を知っていますから、「喪乱帖」がスッと入ってくるのですけれども、当時はまだ四世紀ですから、このような唐時代風の書はないわけです。右側の書(図3)から左側の書(図4)まで一人の人間の書風が変わっていったという、これは大変なことだと思います。本当に天才と言っているのだろと思うます。この作品をお借りできるということ喜んでおりました。

さて、海外展の大体のスケジュールです。展覧会は、およそ一年前に作品を確定しまして、仮広報を打ちます。先行チラシを発行します。半年前に正式広報をし、記者発表をします。そして図録を発行しますので、図録の最終原稿を二か月前には完成して、図録を作っていくというようなスケジュールが進みます。

すでに現場同士では、作品、明清の書も含めて五十件、プラス「万歳通天進帖」を貸していただけるといふ内諾は取れているのですけれども、

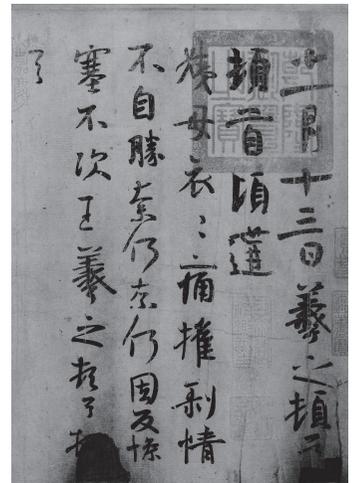


図3 王羲之「姨母帖」

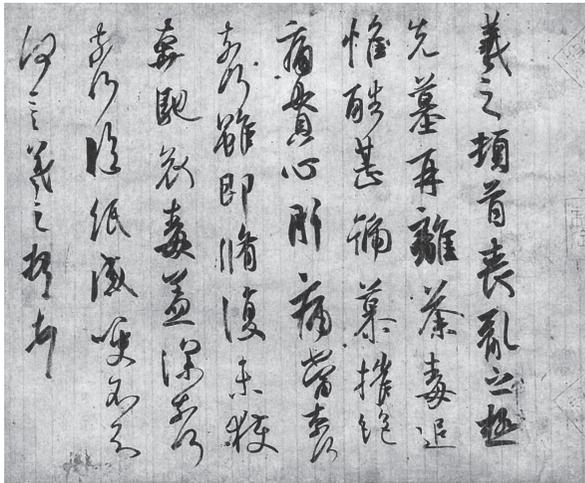


図4 王羲之「喪乱帖」

も、なかなか最後の協約書が結べません。半年前になっても結べませんでした。「いや、困った、大丈夫かな」と思っていた矢先の八月十五日、何が起きたのでしょうか。尖閣諸島問題が

勃発してしまつたのです。われわれ、協約書の文面を作り上げまして、その文面を持って北京に行ってお互いが署名をすれば、もうそれで決まりというところまで来ているのですけれども、なかなか面会の日時が決らないのです。「今日時を調整していますので、お待ちください」で、八月十五日を迎えてしまいました。

九月になつてもその協約書が結ばなくて、「これは、さすがに無理だろう」ということで、中国からの借用を断念しました。ここからです。もう仕方がないので、日本国内にある作品で展覧会を構成しようということになりました。いろいろと国内の美術館、博物館に足を運びまして、「このような事情なので、申し訳ないけれども作品をお借りできませんか」という依頼が続けていきました。

そうしたなか、五島美術館の名児耶先輩、本当に持つべきものはい先輩ですね。名児耶先輩のところにも行きまして、いろいろお話をしていましたら、「君たち、今日はめっちゃくちゃ顔が暗いね」と言われました。そこで「よくぞ聞いてくれました。実は、こんな事情なんです」ということをお話ししたところ、「そういう事情だったら、双鉤填墨と考えられる未公開の作品がある。それを鑑定して、いいと思つたらお使いなさい」と言ってくれました。それ

が十一月二日のことでした。

ここから作品を鑑定し、何が書いてあるのか読み解いて、使えるのだったら使おうということを進めていきました。名児耶先輩にご相談しつつ、「大報帖」と名前をつけました。十一月二日に、この新発見となる作品を見まして、ようやく十一月九日に記者発表ができました。しかし、この時期は「大報帖」のことには全く触れていません。とにかく「展覧会を開催する」という記者発表を十一月九日にしたと、そのような流れでございました。

そのときの作品が「大報帖」でございます。三行二十四文字です。本当に小さな作品です。長い間、小野道風の書と信じられて整理されてきました。私たちのスケジュールといたしましては、九月四日に館長、副館長が中国大使館に行きましていろいろと何度もお話をしていたのですが、もう九月九日にこれは無理だろうと断念します。報道発表会もこれは延ばすしかないと思っていた矢先、十一月二日にこの「大報帖」を示されました。

その後、「大報帖」だけでは心もとないと思われるけれども、プリンストン大学付属美術館から「行穰帖」を借りよう、香港から蘭亭の有名な拓本を借りよう、ということと海外出張を行い、また、国内での集荷も続けながら、この「大報帖」

は一体何なのだろう、何が書いてあるのだろう、というようなことを考えていました。図録の総論も書いていくということで、当時は、新幹線の中や飛行機の中で図録の総論や解説を書いておりました。同僚からは、「空中執筆」と笑われていたことです。

そして、一月二十二日の開幕を控え、NHKさんや毎日新聞社さんと事前に打ち合わせをしまして、一月八日、この日のちょうど朝七時のNHKニュースに「新発見、王羲之の新しい資料が出た」と発表いたしました。毎日新聞社さんの方でも紙面を飾っていただきました。「日本ですごくいいものが発見された」ということで、ここから急に、中国からも関心を得て、盛り上がっていくということになります。

先だって九州国立博物館の方で買い上げさせていただきました「妹至帖」という作がありますが、あまりお金のことは言えないのですけれども、二行十七字で三億ウン千万円です。それよりも字数の多い作品が出てきたのです。この「大報帖」、前から知られている「妹至帖」と非常に書風がよく似ています。例えば「情」という字を取り上げますと、本当に似ている、書風が一致しています。あとは内容です。

内容が良ければ、しっかりと押さなければ、王羲之の間違いない写しと言っているだろうと

いうところなのです。これを読まないといけません。とりあえず、「このようにことが書いてあるのかな」、「ここで切れるのかな」ということで読み進めていきましたが、どうしても分からない字がありました。「大」という字がある、「期」という字がある、これは何なのだろう、動詞なのか名詞なのかも分からないのです。これは本当に悩みました。

先行研究をいろいろと見てまいりますと、王羲之はこのような家系図です。お兄さんに王籍之という人物がいます。お兄さんが早くに亡くなってしまいます。その息子、王延期を、王羲之はそれこそ八番目の息子として、本当に自分の息子のようにかわいがります。ですから手紙のやり取りの中ではこの王延期のことを「期」一文字で書いています。同様に、遠縁に当たる王昶のことを「大」一文字で表している、ということが分かってまいりました。

そうすると、このような釈文になるだろうというところで、少しずつ読めてくるのですけれども、これでもまだ少しくらくらない字が実はありました。それは最初、私は「星」と読みました。どうしてもこれは「星」であろうと読めたのです。ただし、意味が取れませんでした。どうしようかということでもう少し幅を広げて、前の字が「転」ですか、「〇」という語を

王羲之の他の手紙の中で使っていないだろうかと、ということまでいろいろ調べたところ、これがありました。六、七種類ぐらいはありましてでしょうか。

その中に「転差」という用例があります。「うたた差ゆる」。「差ゆる」は「体調がよくなってくる、次第に体調が回復してきました」という用例です。双鉤填墨、写しということもあるのでしょうか、一目では「差」という字には読めなくて、「呈」であろうかと悩んでしまいました。しかし、「うたた差ゆる」という文字だろうということが分かってまいりました。

それで、最終的にできた釈文が、こちらです。最初の一文字は分かりません。接続詞だろうと思います。「すなわち」と仮に読みました。「大報す、期うたた差ゆるなり」と。「王劭が連絡をしてきました。王延期の体調は次第によくなってきたようです」。「快ならざるを知る」、「不快であることを手紙で知りました」。「当に情感に由るが佳なるが如くなるべし」、「感情の流れに身を任せてお過ごしなさるのが、あなたにとって一番いいかと存じます」ということです。

話題が「私」に移りまして、「吾、日々幣せり」、「私は日々疲れています」。これも王羲之の決まり文句です。始終疲れている男なのです。いつ

も「疲れた、疲れた」と言っています。「爾が為に日を解くのみ」、「あなたのために日々を過ごしております」。このような内容であろうということ、書風から見てもいい、内容から見てもいい、王羲之の間違った唐時代の写しだろうということになり、大きく発表させていただきました。

そのような経緯を踏まえた展覧会でした。東博の展覧会で言いますと、三十六日間の十五万人、一日当たり四千人は、中程度のレベルの展覧会になります。書の展覧会からすると、これは圧倒的に多くの方に来ていただいた展覧会と言っているかと思えます。

そしてこの図録の購買率が、一七・九%でした。東博の図録の購買率、通常は一桁です。それも五%や七%で、一桁の後半になると非常に売れたということになります。この展覧会は、中国からも注文がいきなりたくさん入りまして、百冊単位で買ってくれました。現在も、この一七・九という数字は、東博でもトップクラスの購買率ということになります。尖閣諸島問題が起きているなか、舞台裏ではこのようなことをしていたという、そのようなエピソードがございます。

二つ目の展覧会は、顔真卿の展覧会をいたしました。これももう皆さんで承知のことかと思

います。中国唐時代の政治家です。安史の乱で大功を立てました。顔法とよばれる新たな書風を作り出した人物です。一つ忘れてはいけないことは、紛れもない顔真卿の真筆が残っていることです。王羲之と正反対です。展覧会をやるからには真筆を借りようということでも動き出した展覧会でした。結果としては、王羲之展を上回る方々に来ていただきました。十九万八千人、一日平均五千六百、図録購買率は王羲之展の購買率を更に上回ってしまっていて、今現在これが東博のレコードになっております。三〇%近い方にお買い求めいただきました。

このときにお借りました「祭姪文稿」です。私も、いろいろな好きな中国書跡があるので、けれども、一番何が好きかと言われたら、間違いなく「これ」をあげます。それぐらい、すごいオーラを出している、すごいパワーのある作品です。これは、もう、通常の名品というレベルを超えて、本当に歴史上の名品中の名品だと思います。これをリクエストしました。台北故宫とも古い付き合いがありまして、貸してくれると言ってくれたのです。これはいい展覧会になるぞ、と思っていました。

これも一月の開募になりますが、私の同僚がいみじくもこのように言ってくれました。「おまえがチーフになる展覧会、海外展は、とにかく

く何かしら問題が起きるのに、今回ばかりはスムーズに進んでいるな。おかしいね」と。その「おかしいね」と言われた矢先、これが借りられないかもしれない大きな騒動が起きてしまいました。

展覧会が開催された後、『ニュースウィーク』に記事が載ります。世界中で発行される『ニュースウィーク』に、次のような記事が載りました。これは顔真卿展が無事に開幕した後の記事ですけれども、「このようなことが、実は日本ではあったのだ」ということが世界中に報道されました。東博が台湾から作品を借りることに対し、中国の方々が、「とんでもない」と言って激怒し、大炎上したという内容でした。

その記事を用意したので早口で読んでみましょうか。「東京国立博物館が一月十六日から書の特別展『顔真卿―王羲之を超えた名筆』を始めた。顔真卿は中国・唐代の政治家・書家で、書聖と言われた王羲之と並び、中国人に最も尊敬されている。特に今回、日本で初公開された肉筆『祭姪文稿』は、『天下第二行書』と呼ばれる中国屈指の名書だ。ところが、この『祭姪文稿』の日本初公開をめぐり、中華圏で大騒ぎが起きた。まず、台湾人司会者が、台北故宮博物院が至宝として收藏するこの文稿を日本に貸し出すことについて、破損が懸念されるとの

理由でテレビ番組の中で批判した。この言葉はすぐに大陸の官製メディア『環球時報』に利用された。

これはちょうど十二月ぐらいのことでした。たまたま実家に帰省していました。どんどんメールが入ってくるのですが、YouTubeでもそのテレビ番組が流れていました。司会者が国会議員を指で指しまして、「なぜ、あのようなものを貸すのだ」という画像がどんどん流れてきてまして、「これは借りられないな」と思いながら正月を迎えたことを覚えていきます。

続けて記事を読んでもみます。「台北故宮博物院が日本にこびを売るため、こっそり国宝の祭姪文稿を日本に貸し出した！中華民族の気骨を代表する文稿を日本に貸し出すなんて全く無節操な振る舞いだ。しかもわれわれの記者の取材によると、日本側はこの大切なわが国宝に対して、なんの特別保護もしていないし、誰でも勝手に写真を撮ってもいい」というあたり記事だ。この記事はたちまち中国のSNSで広がり炎上した。「中国人でも見られないものをなぜ日本で展示するのか』『民族の気骨がないのか？日本人に貸し出すなんてけしからん』。真相を知らないネットユーザーは腹を立て、批判が殺到した。

しかし、この怒りは特別展が開幕すると徐々に

に収まった。現場を訪ねた中国人たちが展覧会の本当の様子を自らの目で確認し、SNS上で発信したからだ。「祭姪文稿はきちんと特別展示室に保護されている』撮影はもちろん禁止』。中には『世界最高レベルの書道展だ！素晴らしいかった！』という声もあった。確かにこの千年を超えた名書は中国人だけでなく全人類の歴史遺産だ。今回の特別展は、中国の伝統文化を世界に披露する絶好のチャンスでもある。しかし中国人は共産党政権の中国が成立して以来、文化大革命などで数え切れないほど文化破壊を起こしてきた。この『祭姪文稿』がもし中国に保存されていたら、今も見られるかどうか疑問だ。偽ニュースで簡単におおられる今回の様子を見れば、なぜ中国で文化破壊が起きたのかがよく分かる」と。

このような報道が『ニュースウィーク』に載り、世界中に発信されました。そのような騒ぎが実は水面下で起きていました。

海外展は、やはりいろいろなことが起るものです。借りようと思っても借りられないことがあるということです。結果、お借りできなかったものがこちらの作品です。目玉の作品ということで、会場をこのような形でディスプレイさせていただきました。作品のイメージに合うように、このように燃えるようなバナナを垂らしま

して展示をさせていただいたところ、多くの方々に来ていただけたというところでございます。

また、この作品が来ないということも考えておりまして、これに代わる各品も作っておこうということで準備をしていたものが「紀泰山銘」です。とにかく国内にある作品で構成しようと思っておりましたので、何にしようか思い悩みました。さすが東博は百五十年を超える歴史がありますので、すごい作品があります。当時、この作品は相当長い間、展示をしていない作品でした。高さが十二メートル、幅が六メートル、重さが八十キロあります。

これを展示しようということで、これ(図5)はその下調査をしているときの写真です。下調査をすると言っても、一人で運べるようなものではありません。日通さんを十人ぐらい雇いまして、この調査のために移動してもらいました。巻いている状態、このように重たい作品を測る重量計で測って、この重さが出ました。

これ(図6)は、中国の泰山にあります「紀泰山銘」へ下調査に行っていたときの写真なのですけれども、右側にあります金色の文字、これが原石です。これを拓本に取ったものです。手前におります二人の人物、右側、帽子をかぶっている方は、島谷館長です。一緒に調査に行っ



図5 「紀泰山銘」拓本の下調査風景

たときの懐かしい写真です。

さすがにこれだけ大きくなりますと、東博といえどもかかりきれないのです。どうしても下が床についてし字状になってしまいますので、特設ステージを作りました。皇帝ですので色味



図6 泰山にある「紀泰山銘」の下調査(島谷館長、登場！)

も考えました。皇帝の色ということで、バックを黄色にさせていただきました。大きなステージを作りまして、ここに作品をかけていきます。ただ、とにかく何十年も展示したことがないので、応急修理はしたものの、方が一のことかあっては困ります。ですから、慎重に慎重を期して、「どのように展示をしましょうか」という会議を、本当に何度も重ねました。

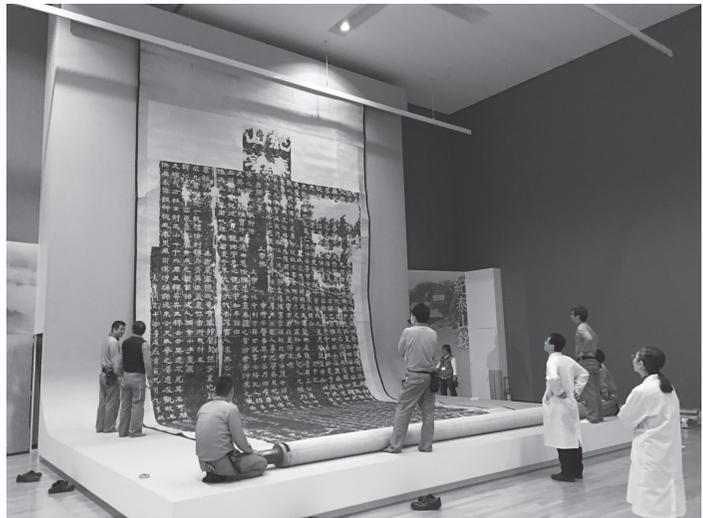
会議を重ねた結果、「これは、人力で下から上に上げるのは無理だろう」という結論に達し

まして、裏側にワイヤーを通して、右と左の人海戦術で引き上げました。トランシーバーを持っている人が発信して、後ろ側に音声を流します。「右側の人、早く」、「左側の人、遅く」などと言いつつ、ゆっくりゆっくりこれを持ち上げていくわけです。

表から見ただけでは分からないと思うのですが、けれども、展示するためには、実はこのようなことをしています。安全を最優先して作品をかけたまま、下ろすときも同じことをやります。右と左がちょうど水平になるようにして作品をかけます。かけた作品がこちら(図7)でございます。祭姪文稿は結果として出展できたのですが、祭姪文稿が来なかった場合のメインとなる作品、こちらも見どころの一つということで、このようなコーナーを作りました。

東博は、このような海外展あるいは特別展を開催しますと、結構な頻度で天皇后両陛下がお見えになります。私も何度か説明をさせていただきますました。このときもおいでになられるということ、どの作品にしようか迷いました。迷った挙げ句、「撮影が映える」ということで、ここを選ばせていただきました。当時の天皇后両陛下がここをご覧になっているところを、各メディアさんがテレビ撮影や写真撮影をしたという場所でございます。

図7 展覧会会場の「紀泰山銘」拓本



何度も事前打ち合わせをします。両陛下が東博にいらっしゃるときは、全ての信号が青になります。お帰りになるときも全ての信号が青となるため、一分刻みで細かなスケジュールを立てます。宮内庁の方からは「陛下の前に出てはいけません。陛下に近づきすぎてもいけません。大きな声で話していただき」と、そのようなことを言われました。その結果、私がどのような姿勢になったのか、それが次の画像(図8)で

ございます。

本当に大きな作品を天皇后両陛下がご覧になられています。この頃は私も若かったのですね。今やれと言われたら、このような筋力はないのですけれども、前に倒れんばかりの姿勢になって説明させていただきました。

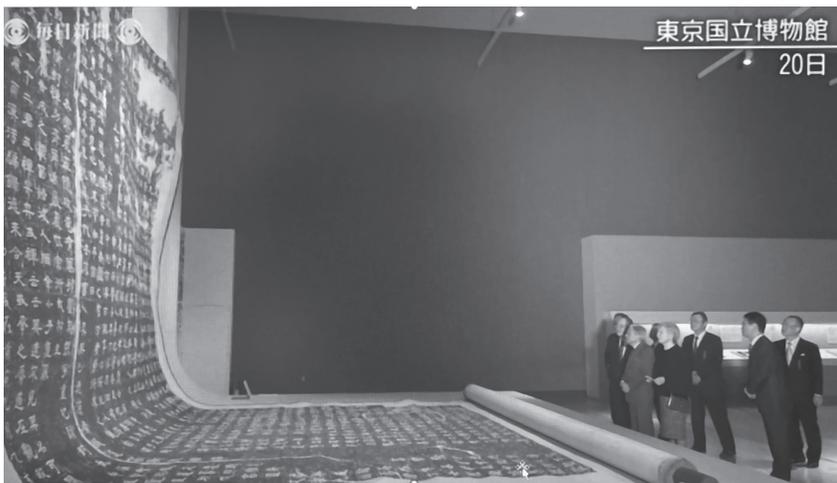


図8 当時の天皇后両陛下をご案内する富田



図10 「顔真卿」展の本チラシ



図9 「顔真卿」展の先行チラシ

これ(図9)が先行チラシで、こちら(図10)が本チラシです。先行チラシと本チラシで何が変わったのかと言いますと、キャッチコピーです。「眺めているだけで、こころが洗われる」というキャッチコピー、これが変わりました。伊集院静さんがこのキャッチコピーを考えてくれました。これにはまた物語があります。

伊集院静さんは書が大変お好きで造詣が深いということでも、王羲之展を開催しているときに何度もおいでいただきました。ご案内をしたのですけれども、なんと毎週毎週来てくれました。図録もたくさん買ってパリの友人に送ったというようなことをおっしゃっていました。

ここで触発された伊集院さんは、『文藝春秋』で書に関する連載を始めました。当初は一年限りということに連載を始めるのですけれども、好評を博しまして、結局四年半ぐらい続きました。四年半ですから、やはり途中でネタに困ります。そうしますと、「何かいいネタはないか?」ということ、間に出版社の方が入っているのですけれども、私のところいろいろな来ます。「このようなネタがあります」と返すと、それがまた続いてきます。私も疲れてきました、台東区立書道博物館の鍋島さんに協力を願って、「ちょっと、いろいろなネタを出してくれませんか」と、二人ですっとそのようなことをさせていただきました。

「顔真卿の展覧会、お忙しいと思いますのでご無理だったら結構ですけれども、一言書いていただませんか」と、伊集院さんの編集を担当されているMさんという人にお伝えいただきました。そうしたらMさんから連絡がありました。「俺は四百文字百万なんだけれども、

こればかりは仕事じゃねえからな」と、おっしゃっていました」ということなのです。お引き受けいただけただかどうかは全然分かりませんでした。

ところが、この本チラシの最終校正日、「今日が本日に最後。これ以上文字が変えられない」という日にFAXが届きました。「眺めているだけで、こころが洗われる。人間が深く生きるといふことはこのようなかたちかと顔真卿は書で教えてくれる」。この言葉をいただきました。こちらの方に載せさせていただきました。本当に感激したひとときでした。

チラシを書いていただけたのですけれども、実は、もう一つ驚いたことがありました。当時『週刊現代』に連載をお持ちだったので、私はこれを全く知りませんでした。連載には、このようなことが書いてあるのです。「今夏、顔真卿の書を二カ月臨書したが、やはり格が違う。門前の小僧の経ではないが、臨書まがいのことも、やらないよりやった方が良いでしょう。第一、早朝より墨をすれば、あの香りと色味で体のどこかが洗われる気持ちになるから、書には何かがあるのだろう」と。キャッチコピーをお願いした後、伊集院さんは二か月もこの顔真卿の書を臨書してくれたのです。この体験を基に左側のコピーを作ってくれたと

いうことで、本当にお世話になったと思っております。

伊集院静さん、令和五年、二〇二三年の十一月二十四日、七十三歳でお亡くなりになりました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。このようなことが、顔真卿の舞台裏ではありました。

また、顔真卿の開催中には、中国からもニュースが飛び込んできました。中国西安です。何が書いてあるかと言いますと、「東京はあまりにも遠すぎる。西安は近いので、いろいろしゃい、西安にいらっしやい。私たちの展覧会をご覧なさい」と。それぐらい顔真卿の展覧会は中国にも大きな影響を与えたというところがございます。

そして、開幕の翌日です。やはり、中国はすごいのです。「五万人の中国人が、この展覧会を見た」と、そこまで分かってしまいます。それだけではなくて、「どの都市の人が何人見た」というところまで分かっています。翌日にはさらに詳しい分析がアップされていました。年齢別にはこれぐらい、四十歳から四十九歳が三九〇に上るといって、ここまで分かってしまうというのは本当に恐ろしいと思いました。

そのような展覧会、おかげさまで来館者数は一日平均五千六百八十三人の方々、図録の購買

率は二八・二％というところで、現在もこの図録購買率は東博のレコードになっております。

さて、後半でございます。「王羲之への憧憬」ということで、話題はいろいろあるのですが、今日はあえて翁方綱と李宗瀚という話題をご紹介させていただきます。

翁方綱は雍正から嘉慶にかけての人で、李宗瀚は三十六歳年下になります。何と言いましても大学者です。頭が良かった。二十歳で科挙の試験に及第しています。乾隆から嘉慶期は、中国清朝の歴史の中で最も学問が盛んになった時代で、「乾嘉の学」といっています。その乾嘉の学を代表する学者が、翁方綱です。地位もかなり高く、高位高官に上り詰めた人です。

その三十六歳年下の李宗瀚という官僚が、自分の部下となりました。彼は二十五歳で科挙に受かるのですけれども、おじいさん以来の巨万の富を受け継いだ、本当のお金持ちでした。彼は翁方綱に書を習いました。撥鋒法（はつとうほう）という、腕を上げて、書くのがつらい書き方らしいのですけれども、その教えを受けます。教えを受けるとともに、書の学問も受け継ぎます。翁方綱は李宗瀚に、いろいろな情報を与えます。「あそこがいい拓本がある、ここにいい拓本がある。君はお金があるのだから、あれを買いなさい」と言い、彼は拓本のコレクター

として知られるようになります。

有名なものが、「臨川李氏四宝」、李宗瀚コレクションのベスト四です。この李氏の四宝が、実は日本に全てあります。顔真卿の展覧会のとときに、この四宝を全部集めました。奇跡の再会というところで、中国でもたいぶ好評を博しました。一つは「啓法寺碑」です。丁道護が書いた、隋時代の作品です。翁方綱が李宗瀚に宛てた手紙があります。

その手紙を詳しく読んでいきますと、李宗瀚に事細かに指示しています。「このような場合



に、版木に何を使うのか」という指示をしているのです。紫檀、黒檀がありますけれども、「それではいけない」と。「香楠あるいは豆瓣楠」というらしいのですけれども、クスノキの一種だと思えます。「これがいいのだ」と、李宗瀚に伝えます。李宗瀚はそのとおりその木を使ってこれを装丁しています。

もう一つ。字を彫り、字を彫ったところに色を入れる。これも、「藍色でもいいけれども藍色よりは緑色がいい」と。「間違っても金などにするものではない」と、そのようなことを言っています。これが乾隆時代の美意識なのです。当時の美意識の最先端を、翁方綱から伝えられまして、李宗瀚はそのとおりに装丁しております。

そして李宗瀚は、丸い「寶」印、自分の本当にお気に入りの作品にはこの丸い印を押すと言われています。李宗瀚の十宝、ベスト十があります。李宗瀚の二十宝、ベスト二十があります。それにはこの丸い「寶」印が押してあるところがあります。

「孔子廟堂碑」も同じような材木を使い、やはり緑色を入れています。「こげくないと粋じゃない」というところがあります。コクシやニシキを使うのですけれども、これも翁方綱は李宗瀚に手紙を書きまして、「古い宋時代ぐらいのコクシ

を使いなさい」と。阮元(げんげん)というもう一人の大学者がいるのですけれども、「阮元が古いコクシを持っているから、彼に譲ってもらいなさい。私が阮元に直接言うわけにはいかないのです、誰か人を介して譲ってもらいなさい」と、そのようなことも言っています。冒頭にはないのですけれども、最後のページに丸い「寶」印を押しています。

「孟法師碑」は、李氏の四宝の中で最後に手に入れるのですけれども、この孟法師碑も同じような装丁にしています。これは冒頭のところに丸い「寶」印を押しています。

もう一つ、「善才寺碑」、魏栖梧です。実際に書いた人は魏栖梧、拓本の中では褚遂良と書いてありますけれども、これは褚遂良の拓本から切り貼りましたものです。魏栖梧と言っても誰も知らないのです。褚遂良だったら高く売れるだろうということまで切って貼ってしまいました。昔からそのようなことをしていました。ただ、他の文字は間違はなく魏栖梧というところで、これも李宗瀚のベスト四になりました。

翁方綱は、その中でも孔子廟堂碑がとても好きで、李宗瀚に購入を勧め、李宗瀚が買った後に、李宗瀚のところに行ってこの作品を借りました。何日も何日も執拗に研究しまして、著作を作ります。今日はこの細かい文字は読みませ

なければ、翁方綱は本当に孔子廟堂碑が好きだったということが分かります。

他の手紙もありまして、そこにはいろいろと拓本の価格に言及するところがあります。「善才寺碑については、もう十余金に過ぎないのであれば買ったほうがいい」と。「それより高いのであれば、いや買わなくてもいい」と。そのようなことを李宗瀚に言います。一方、「聖教序については、値段が高くて、これは買ったほうがいい。その価格は大体百金以内であるべきだ」というようにアドバイスしています。孔子廟堂碑についても、「とにかく、これはいい拓なので、ぜひ手に入れなさい」と言っています。

このようなことを総合しますと、翁方綱の唐碑に対する考えは、王羲之を主とした、いわゆる晋人の書法を受け継ぐ作品を高く評価しているということが分かります。

彼の著作を見ますと、『蘇米齋蘭亭考』があります。「唐碑選目」というものもあります。そして目玉中の目玉、『孔子廟堂碑』の著作もあります。蘭亭序は本物がありません。王羲之の書は、どこに一番伝えられているのかというと、唐時代の能書なのです。彼らは、本物の蘭亭序を見ている。そこから王羲之の書法を身につけています。「身につけた彼らが書いた唐

時代の碑の中に王羲之の書法が流れているだろう」ということで、翁方綱は、蘭亭序と唐碑を通して王羲之の書法を解明しようとしたので「これまでですか」というくらい執拗な研究をしています。これも、どこのつまりは、王羲之の書法に近づくために、王羲之に憧れてこまごまの研究をしたということですよ。

李宗瀚の四宝については、「誰が、いつ、四宝を決めたのか」と疑問に思っておりまして、当時、いろいろな方に聞きました。中国の研究者にも聞きましたが、なかなか分からないということだったので、何年もかかって調べました。これは、北京図書館に行ってみつけたもので、李宗瀚自身の書です。道光三年、李宗瀚が五十五歳のときに書いた文章です。翁方綱が亡くなって五年たっています。李宗瀚はもう買えないかと思っていたのですけれども、たまたま孟法師碑を入手しまして、「右の四碑、四つの拓本を、門外不出の四宝と定めた」としてあります。

簡単な訳をしました。「隋唐の妙秘といえは、楷書はすなわち丁道護、虞世南の精髓、褚遂良の骨気、魏栖梧は名を知る者も罕である。その中の一つを得ようとしても、すでになく。ましてや四つを揃えることは非常に難しい。珍しさは趙璧の比ではない。故に我が家からこの四つ

の宝を出すことなかれ」ということを言っております。李宗瀚は、隋唐の孤本を四宝としたということですよ。「孤本」とは、もう石碑が壊れて拓本が取れないものです。拓本も一つしかありません。その四つの孤本を集めて、自分のバスト四にしたということですよ。

コマージュでございませう。年明けに、中国の書の展覧会が三井記念美術館で行われます。そして東博と書道博で開催しております連携企画、今回が第二十二回目になるそうですが、「拓本の楽しみ」というタイトルで展開してくれるそうです。今回、今ご紹介しました李宗瀚の四宝も、全て書道博の方に展示されるということですので、ぜひご覧いただければと思います。

もう一つコマージュでございませう。私ども九州国立博物館が来年の十月、開館二十周年を迎えます。本当に多くの方々のご支援によりまして今日を迎えることができました。特別展は、今までにちょうど七十本開催しました。阿修羅展というものもありましたけれども、直近では長沢芦雪の展覧会をしました。今年は、四月から年末まで三階の特別展示室をリニューアルしております。蛍光灯をLEDに変えております。ほぼ完成しました。東博で開催しております「はにわ」展が年明け一月から九博にやって

まいりまして、リニューアルイヤー、アニバーサリーイヤー、二十周年イヤーが始まるということですよ。

二十周年ということで、ロゴマークを作りました。そのロゴマークの動画をご紹介させていただきます。二十周年の感謝をすべての人に、次の一歩もあなたと共に、このようなキャッチを作らせていただきました。ちょうどこの二十の右の方、ゼロの中に見えるものが九博の一部です。緑の森の中に青い博物館が建っているものですから、このような色調のロゴを作らせていただきました。東博でもいい展覧会をやっておりますし、書道博でもいい展覧会をやりますけれども、九博の方にもぜひおいでいただければと思います。

本日は、ご清聴、まことにありがとうございます。

【質疑応答】

質問 富田先生、貴重なお話を楽しくお聞かせくださいまして、ありがとうございます。

ご存じの方もいるかもしれませんが、先ほどの李氏の四つの拓本が、なぜ今、日本にあるのかということを少しお話しした

けるとありがたいのですが。

富田 今ご指摘いただきましたように、李宗瀚の四つの名品が日本にあります。大きな流れで言いますと、清朝ががたがたに揺れて中華民国になるという時代がまいります。その頃、今まで日本人が見たこともないような名品が海外に流れる、そのような状況が起きました。一部は欧米の方に流れていました。

そのような状況を見た内藤湖南などが「欧米に流れてもいいけれど、中国文化を最もよく理解するわれわれが、これを守らなければいけないのではないか」というようなことを提唱しました。そこで、有識者や、当時の政財界の人たちが、そのようなものを日本で買い受けるというようなことをしました。この四つの作品も、そのような流れの中で日本に来たものです。

一番目の作品は記録を見ますと、羅振玉がこれを買ひ、日本に来ました。そして日本に来たときに、生活費を捻出するために日本に売ったということが分かっています。残りの三つの方は、三井財閥、三井高堅という人物が河井荃廬を通して中国から買いました。河井荃廬は目利きですよ。



河井荃廬は中国に行って、現地でいい作品を買いました。当時、金頌清という中国人のバイヤーがいて、彼にもいろいろと口利きしてもらって、河井荃廬はたくさん作品を集めました。

これらも金頌清が李宗瀚の末裔まつぎの家に引きまして、交渉したものです。李宗瀚のおうちは、国は揺れているけれども、大変なお金持ちでした。お金に困っていません。けれども何度も何度もお願いをして、当時の手紙が残っていますが、四年か五年か交

渉してようやく「その金額だったらお分けしてもいいでしょう」という話になりました。金頌清が手紙を書いて、それを三井さんに送りました。本当に三井家はすごくて、そのような手紙から電報から、全てが記録に残っているのです。それを見せていただきますと、「何年も何年もかけて、ようやく心を開いてくれました。値段は幾らである。それを上海支店の方に入金してくれ」というような記録が残っています。残りの三つは、三井家の方で購入したということになります。

実は年明けの展覧会で図録の方に書かせてもらおうと思っただけなのですが、「李氏十宝」という十宝があります。金頌清が李宗瀚の末裔の家に行って交渉している中で、「李氏の十宝、ベスト十がある」と。「ベスト十は、これとこれと、これである」ということを詳しく書いています。その李氏の十宝の六つぐらいが、実は日本にあるということが分かっています。今、鍋島さんが、それを全部、展覧会に出そうと画策しています。

李宗瀚の四つの名品につきましては、そのような状況があって日本に流れてきたというところがございます。